

『吾輩は猫である』 冷淡

Junko Higasa 2016.6.18

第十章。猫の吾輩の空腹の訴えが人間の御三に伝わらないように、庶民の困窮は上層階級には伝わらない。古井武右衛門君の悩みも苦沙弥先生には伝わらない。それはいずれも両者間の関係が薄いからである。御三は珍重しない猫は眼中になく、苦沙弥の役職は便宜上与えられたもので、本人の意思から出立したものではない。人間の感情は自己に関係する所に端を發し連鎖的に動くものである。そして『冷淡は人間の本来の性質であって、その性質をかくそうと方^{つと}めないのは正直な人である』しかし社会的交際において藝術的同情の発現は当然で、役職には威力があると錯覚しているのが現代の世の中である。

その世相教育を受け、現代思潮に則り罪悪感なく他人をからかう武右衛門君は、自己救済のために常日頃困らせている相手に協力を願い、監督という肩書だけに期待をかけ、遠回しに相手の同情を引き出そうとした。これは人間を買い被った我儘である。彼は苦沙弥の同情を得られなかったばかりか、細君と雪江嬢に「事件の滑稽」を笑われた。

この経験により、武右衛門君は他人の心配事に冷淡になるだろう。足元をすくわれぬように立ち回らなくては金田のような成功者になれないばかりか、世間からはじかれてしまうのである。このようにして文明社会は、遠回しに人を動かして自己責任を逃れる『開化の業に束縛された畸形児』を増殖させる。